第六講『松帆浦物語』　関西学院大学

次の文章は、『松帆浦物語』の語り出しの部分である。これを読んで、後の問に答えなさい。

遠からぬ世の事にや侍りけむ。四条わたりに、中納言にて右衛門の①かみかけたる人なむおはしましける。中将殿とて御子一人ありて、②さうざうしく思しけるに、③ありありて稚児(ちご)出でき給ひにける。生ひ先見えてかたちいと美しく物し給ひければ、限りなくかしづき給ふほどに、父の卿ははかなくなり給ひぬ。④たづきなきやうにておはしましけるに、⑤中将の君らうたき物にして、十ばかりまでぞありける。そのうち*横川(よかは)に禅師の房とて、このをぢになむおはしける。中将に申し給ふ。「この若君、いたづらに生ひ出で給はむよりは、山にのぼせて物習はし給へかし」など⑥よりよりすすめ⑦申されしかば、横川へぞのぼせられける。大方の学問にも和歌の道にも心を入れて、筆とる事も⑧たどたどしからず、はかなきすさみごともつきづきしく、心ざま人に優れたりしかば、一山のもてあそび、稚児童(わらは)もむつましき事に思ひし程に、三年ばかりこの山に送りけるになむ。かかればこの母君久しく見ぬは悲しとて、折々里へ呼ばせけるに、ある時禅師申されけるは、「学問の方もさとく賢き人なり。法師になして父の御跡をも⑨とはせ給へかし」などねんごろに語らひ申し給へば、「⑩あたらかたちを⑪墨の袖にやつさむも情けなく、

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

⑫八重たつ雲にまじりなむも心苦し」などのたまひて、うちとけたる答へもし給はねば力なし。かくて後はあやふくや思はれけむ、京に住ませむ事を中将にも申し給ふに、つれづれの慰めにもとや思はれけむ、同じ心にのたまへば、禅師もいかがせむとて、泣く泣く京へぞ送りける。この稚児も横川に住みつき給ひければ、寂しかりし山水にも名残多く、遊び伴ひし稚児童にも離るることなむ悲しかりける。みな京近きわたりまで送り来てぞ名残惜しみける。さて禅師立ち帰りて、年月手習などして住み給ひし所を引き開けて見給へば、いと美しき手して障子に書き付けらる、

⑬九重に立ち帰るとも年を経てなれし⑭深山の⑮月は忘れじ

これを見て、禅師の君よりはじめて、皆泣きにけり。かくて後は元服して藤侍従とぞ申しける。*あげおとりもせず、いよいよ目驚くばかりのかたちにて物し給ひける。十四になり給ひし⑯春の頃かとよ、もと立ちなれし横川の法師、また京にも優なるをのこあまた来あひて、「北山の桜いまなむ盛りなるよし人申すなり。侍従の君見給へかし。伴ひ奉らむ」と口々言へば、深山がくれの色香も殊にゆかしき心地して、俄に思ひ立ちぬ。道の程も人目⑰つつましければ、わざとやつしてぞおはしける。若きどち⑱駒なめてみちすがら眺め渡せば、遠き山の端そこはかとなく霞みつつ、野辺のけしき青み渡り、芝生の中に名も知らぬ花

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

ども、すみれに交り色々咲きて、雲ゐの雲雀姿も見えず囀（さへづ）りあひたるさまども、いはむ方なし。心ざす山はやや深く入る所にて、水の流れ岩のたたずまひも、写し絵を見るやうになむ覚えける。うち吹く風にそことなく匂ひ来るに、人々心あくがれて急ぎのぼりつつ見れば、数知らぬ花ども枝もたわむまで開きつつ、⑲今日こずはと見えたり。山がくれともいはず、都のかたの人と見えてあまた集ひ来て、木（こ）の本、岩がくれの苔にむれゐつつ、歌よみ酒のみて遊びなどさまざまにぞ見えし。侍従の君は花に眺め入りてゐ給へるに、花よりもこの君に目とどめたる人あまたありて、⑳従ひ歩（あり）くも物むつかしく覚えければ、㉑花にはうとからで、引き入りたる所もがなと、願ひ求めつつ行くに、本堂のかたはらに、*院家（ゐんげ）にやあらむ、檜皮（ひはだ）の軒朽ち忍草所得顔（ところえがほ）にて、破（や）れたる御簾かけたるあり。このつれたる人の中に知るたよりありて、ここにしばしのやどりを構へたり。短冊とり出しうち吟じなどしけり。京より持たせたる、*檜破子（ひわりご）、*ささえやうのもの、㉒旅のまかなひはかなくしつつ遊ぶ。

（注）
*横川（よかは）…比叡山延暦寺の三塔の一つ。
*あげおとりもせず…元服して髪をあげても、前より姿が悪くなることもなく。
*院家（ゐんげ）…寺内に設けられた本寺に付属する寺院。
*檜破子（ひわりご）…食べ物を入れて持ち運ぶ容器。ヒノキの薄板で作られている。
*ささえ…酒などを入れた携帯用の竹筒。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問一　傍線部①「かみかけたる人」の解釈として最も適当なものを次のイ〜ホから一つ選べ。

イ　髪を剃って僧侶となっている人
ロ　髪を肩に掛けている人
ハ　長官を兼任している人
ニ　神仏に祈願している人
ホ　上座にいる人

問二　傍線部②③④⑥の意味として最も適当なものを次のイ〜ホからそれぞれ一つずつ選べ。

②「さうざうしく」
イ　落ち着かなく　ロ　やかましく　ハ　頼もしく
ニ　嬉しく　ホ　寂しく

③「ありありて」
イ　あってはならないことに　ロ　ようやくのことで
ハ　ありがたいことに　ニ　あるがままに
ホ　たちまち

④「たづきなき」
イ　頼りとするものがない　ロ　慰める手立てがない
ハ　助ける手立てがない　ニ　尋ねる方法がない

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

ホ　手を取り合う暇がない

⑥「よりより」

イ　こともあろうに　　ロ　選りすぐって　　ハ　拠り所として

ニ　時どき　　ホ　特別に

問三　傍線部⑤「中将の君らうたき物にして」の現代語訳として最も適当なものを次のイ〜ホから一つ選べ。

イ　中将の君は病弱な身でありながらも

ロ　中将の君が自分の子供を可愛がって

ハ　中将の君が弟君を可愛がって

ニ　中将の君をお世話したいと思って

ホ　父の卿は中将の君を可愛がって

問四　傍線部⑦「申され」の説明として最も適当なものを次のイ〜へから一つ選べ。

イ　補助動詞「申す」の未然形＋助動詞（尊敬）「る」の連用形

ロ　補助動詞「申す」の未然形＋助動詞（受身）「る」の連用形

ハ　四段動詞「申す」の未然形＋助動詞（自発）「る」の連用形

ニ　四段動詞「申す」の未然形＋助動詞（可能）「る」の連用形

ホ　下二段動詞「申さる」の連用形

へ　下二段補助動詞「申さる」の連用形

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問五　傍線部⑧「たどたどしからず」の解釈として最も適当なものを次のイ〜ホから一つ選べ。

イ　仮名も漢字も十分に習得していて
ロ　なめらかで勢いがよく
ハ　判読できないような文字もなく
ニ　能筆とは言えないが、のびのびしていて
ホ　未熟とは言えないいくらいしっかりしていて

問六　傍線部⑨「とはせ給へかし」の現代語訳として最も適当なものを次のイ〜ホから一つ選べ。

イ　弔いなさいよ　　ロ　弔わせなさいよ　　ハ　継がせなさいよ
ニ　訪ね歩きなさいよ　　ホ　訪問させなさいよ

問七　傍線部⑩⑪の意味として最も適当なものを次のイ〜ホからそれぞれ一つずつ選べ。

⑩「あたら」
イ　せっかくの　　ロ　真新しい　　ハ　可愛らしい
ニ　現在の　　ホ　醜い

⑪「墨の袖」
イ　墨で汚れた衣服　　ロ　薄墨桜色の衣服　　ハ　涙に濡れた衣服
ニ　僧がまとう衣服　　ホ　朱墨で染めた衣服

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問八　傍線部⑫「八重たつ雲」の意味として最も適当なものを次のイ～ホから一つ選べ。

イ　幾重にも垣根をめぐらした中納言の家
ロ　遠くから思いを馳せる妨げとなる場所
ハ　雲が幾重にも重なってわき立つ山奥
ニ　大勢の僧侶たちのいる所
ホ　いつも雲に覆われているはるか遠い所

問九　傍線部⑬「九重（ここのへ）」、⑭「深山」、⑮「月」は、それぞれ何を表しているか。最も適当なものを次のイ～チからそれぞれ一つずつ選べ（同じ符号を何回用いてもよい）。

イ　中将　　ロ　稚児　　ハ　禅師　　ニ　横川
ホ　若君　　へ　学問　　ト　母君　　チ　御跡

⑬＝　　⑭＝　　⑮＝

問十　傍線部⑯「春の頃かとよ」の現代語訳として最も適当なものを次のイ～ホから一つ選べ。

イ　春の頃ではなかったようだが　　ロ　春の頃だったろうか
ハ　春の頃であったかもしれない　　ニ　まさしく春の頃だったなあ
ホ　まさしく春の頃に違いない

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問十一　傍線部⑰⑱㉒の意味として最も適当なものを次のイ～ホからそれぞれ一つずつ選べ。

⑰「つつましければ」

イ　慎み深くみせるために　　ロ　気恥ずかしいので　　ハ　包み隠すために
ニ　うるさいので　　ホ　用心して

⑱「駒なめて」

イ　馬を交互にして　　ロ　馬を背にして　　ハ　馬を並べて
ニ　馬から下りて　　ホ　馬の背から

㉒「旅のまかなひ」

イ　旅の愁い　　ロ　旅の情け　　ハ　旅の道具　　ニ　旅の食事　　ホ　旅の衣服

問十二　傍線部⑲「今日こずは」の解釈として最も適当なものを次のイ～ホから一つ選べ。

イ　今日咲いている花はなんと見事なことか
ロ　今日来なかったら散ってしまったに違いない
ハ　今日来なかったら二度と来る機会がなかったに違いない
ニ　今日来なかったら都人に会えなかったに違いない
ホ　今日来なかったら人目を避ける必要はなかったのに

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問十三　傍線部⑳「従ひ歩く(あり)も物むつかしく覚えければ」の現代語訳として最も適当なものを次のイ〜ホから一つ選べ。

イ　後について歩くのも何となく不愉快に思われるので
ロ　侍従も何となく嫌がっているので
ハ　後を慕って来る者がいるのも何となく煩わしく感じられるので
ニ　後をつけるようで何となく気が引けるので
ホ　後を慕って歩いて行くのも難しいと思われるので

問十四　傍線部㉑「花にはうとからで、引き入りたる所」の解釈として最も適当なものを次のイ〜ホから一つ選べ。

イ　人には邪魔されず、花を眺めるには都合のよい、奥まった所
ロ　歩くには遠くなく、花を眺めるにも近い、奥まった所
ハ　宴会をするには適当な所で、花を眺めるにも都合のよい、奥まった所
ニ　侍従の君にも相応しく、花を眺めるにも都合のよい、奥まった所
ホ　横川の法師や京の優雅な男たちも花見を満喫するのに都合のよい、奥まった所

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第六講　復習問題

①　次の傍線部ａ・ｂの語句の意味として最も適当なものを、後の中からそれぞれ一つずつ選べ。

明けぬれば、ａいつしかと起きて、人々、…
あまりなるまでｂかしづかせ給ひし御ことは、…

ａ　いつしかと
イ　いつになったら　　ロ　そのうちに　　ハ　不用意に
ニ　不覚にも　　ホ　早々と

ｂ　かしづか（かしづく）
イ　恩恵を施す　　ロ　お仕えする　　ハ　仕事をする
ニ　大事にする　　ホ　養育する

②　「かくて九月になりぬ。九日、御節供参らせなどして、…」の傍線部の式日は何と呼ばれているか。最も適当なものを次の中から一つ選べ。

イ　七夕　　ロ　端午　　ハ　重陽　　ニ　桃　　ホ　萩

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

③「女院へ、なほ参らせて候はAせんと定めて、…」の傍線部A「せ」と文法上の分類や用法が最も近いものを次の中から一つ選べ。

イ　世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし（『古今和歌集』）
ロ　「我に恥見すること。いかでこれが報いせん」と思ひなりて、（『うつほ物語』）
ハ　白河院おりゐさせ給ひてのち、金葉集かさねて俊頼朝臣に仰せて撰ばせ給ふにこそ、初め奏したりけるに、（『増鏡』）
ニ　宮はいとやすらかに、いま少し大人びさせ給へる御けしきの、紅の御衣にひかりあはせ給へる、たぐひはいかでかと見えさせ給ふ。（『枕草子』）
ホ　「いたく暮れ侍りぬ」と申せば、ながめさして立ち給ふに、雁鳴きて渡る。（『源氏物語』）

④「たまきはる」という語は、「ひさかたの」や「ぬばたまの」と同じく、和歌において特定の語の前に置かれる修辞の言葉である。このような言葉を何と呼ぶか、最も適当なものを次の中から一つ選べ。

イ　歌枕　　ロ　縁語　　ハ　掛詞　　ニ　序詞　　ホ　枕詞

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

【第六講】

〈模範解答〉

問一　ハ　問二　②ホ　③ロ　④イ　⑥ニ　問三　ハ
問四　イ　問五　ホ　問六　ロ　問七　⑩イ　⑪ニ　問八　ハ
問九　⑬ト　⑭ニ　⑮ハ　問十　ロ　問十一　⑰ロ　⑱ハ　㉒ニ
問十二　ロ　問十三　ハ　問十四　イ

〈現代語訳〉

遠くない世のことであったでしょうか。（都の）四条あたりに、中納言で右衛門督を兼任している人がいらっしゃった。（その人には）中将殿という御子様が一人いて、（御子様が一人だけなので）寂しくお思いになっていたところ、ようやくのことで（次の）子どもがお生まれになった。将来性が見えて容貌がとてもかわいらしくていらっしゃったので、この上もなく大切に養育しなさる間に、父の卿はお亡くなりになった。頼りとするものがない様子でいらっしゃったので、中将の君が弟君を可愛がって、（弟君は中将の君のもとで）十歳ぐらいまで過ごした。その間に比叡山の横川に禅師の房といって、この子の叔父（の僧）でいらっしゃった。（禅師の房が）中将に申し上げなさる。「この若君を、何もなく育てなさるよりは、比叡山に上らせて物事を習わせなさってくださいよ」などと時どきお勧め申し上げなさったので、横川へ上らせなさった。いずれの学問にも和歌の方面にも熱心に取り組んで、文字を書く方面にも（未熟とは言えないくらい）しっかりしていて、ちょっとした冗談もその場にふさわしく、心遣いも他の人にすぐれていたので、比叡山中の僧がかわいがり、稚児僧たちも親しいことに思っていた間に、三年ほどこの比叡山で月日を過ごしたのであった。そういうわけでこの（若君の）母君が長らく（我が子の姿を）見ないのは悲しいと言って、ちょくちょく（使いをやって）実家に呼び戻そうとしていたので、ある時、禅師の房が（母君に）申し上げなさったことは、「（若君は）学問の方面も上達が早く賢い人である。法師にして亡き父君の後世をも弔わせなさいよ」などと熱心にお話し申し上げなさ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

るので、（母君は）「せっかくの容貌を僧がまとう衣服にする〔＝出家させる・法師にする〕のも嘆かわしく、雲が幾重にも重なってわき立つ山奥に（若君が）交じるのもつらい」などとおっしゃって、受け入れる返答もなさらないのでどうしようもない。こうしてその後には（若君がこのまま比叡山に住み続けると）不安だとお思いになったのだろうか、都に住ませようということを中将にも申し上げなさると、（中将も）手持ち無沙汰な時の気慰みにも（弟がそばにいた方がよい）とお思いになったのだろうか、（母君と）同じ気持ちだとおっしゃったので、禅師もどうしようもないと思って、泣く泣く（若君を）都へ送った。この若君も横川に住み慣れなさったので、（都に比べて）寂しく感じた自然の風景にも名残が多く、一緒に遊んだ稚児僧にも別れ離れることが悲しかった。（若君と親しかった僧たちは）みな都近いあたりまで見送りに来て名残を惜しんだ。そうして禅師が（比叡山に）帰って、（若君が）長年手習いなどをして住みなさっていたところを引き開けて見なさると、とても見事な筆跡でふすまに書き付けなさった（歌があった）。

九重に……＝都の母君のもとに帰るとしても、長年にわたって住み慣れた奥深い山で見た月は忘れまい。なれ親しんだ横川の禅師のことも忘れません。

これを見て、禅師の君をはじめとして、みな泣いた。こうして（若君は）後には元服して藤侍従と申し上げた。元服して髪をあげても、前より姿が悪くなることもなく、ますます目が覚めるほどの（すばらしい）容貌でいらっしゃった。（藤侍従が）十四歳におなりになった春の頃だったろうか、（藤侍従が）もとなれ親しんだ横川の法師や、また都の中でも優美な容貌の男たちがたくさんやってきて、「北山の桜がいま盛りであることを人々が申すようです。藤侍従の君もご覧になってくださいよ。お供申し上げましょう」と口々に言うので、山の奥深く隠れて咲く花の色香も特に見たい心地がして、急に（花見をしようと）思い立った。（北山に向かう）道中も人目が気恥ずかしいので、わざと質素な身なりをしてお出かけになった。若い者たちが馬を並べて道中（の風景）を眺め渡すと、遠い山の端がうっすらと霞んでいて、野辺の景色が緑一色で、生い茂る草の中にも名も知らない花などが、すみれに交じり色とりどりに咲いていて、雲の中の雲雀は姿も見えずさえずり合っている様子などは、何とも言いようがないほどすばらしい。目的地の山はやや奥深く入るところで、（川の）水の流れや岩の有り様も、風景画を見るように思われた。わずかに吹く風にほのかに匂ってくるので、人々は心引かれて急いで登りながら見ると、数え切れないほどの花が枝もたわむまで咲いていて、今日来なかったら散ってしまったに違いないと思われた。人里遠い山奥にもかかわらず、都の方の

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

人と見えてたくさん集まってきて、木の根元や、岩隠れの苔の上に群れ集まっては、歌を詠み酒を飲んで管弦の遊びなど様々に見えた。藤侍従の君は花に眺め入って座っていらっしゃったところ、花よりもこの（藤侍従の）君（の美しさ）に目を奪われた人がたくさんいて、後を慕って来る者がいるのも何となく煩わしく感じられるので、人には邪魔されず、花を眺めるには都合のよい、奥まった所があればなあと、願い求めながら行くと、本堂の傍らに、本寺に付属する寺院であろうか、檜皮の軒が朽ち忍草が伸び放題で、破れている御簾を掛けている寺院がある。藤侍従のお供の人の中にここを知る縁がある人がいて、ここにしばしの滞在場所をしつらえた。短冊を取り出し詩歌を吟じたりなどした。都から持たせた、食べ物を入れて持ち運ぶ檜破子や、酒などを入れた竹筒などのようなもので、旅の食事を簡素にしながら興じる。

〔重要単語〕

○さうざうし…**物足りない。心さびしい。**
○かたち【形・容・貌】…①**姿**。②**容貌**。③ようす。
○うつくし【愛し・美し】…①**かわいい**。②きれいだ。③立派だ。
○ものす【物す】…①**ある**。**いる**。②**いろいろな動詞の代わりに用いる。**
○かしづく【傅く】…①**大切に育てる**。②大切に世話をする。
○はかなくなる【果敢無くなる】…**死ぬ**。
○たづきなし【方便無し】…たよりとするものがない。手段がない。
○らうたし…**かわいい**。
○つきづきし【付き付きし】…**似つかわしい。ふさわしい。**
○むつまし【睦まし】…親しい。
○ねんごろなり【懇ろなり】…①**親切なさま・丁寧なさま**。②**親しみ深いさま。**
○かたらふ【語らふ】…①話をかわす。②**親しくつきあう**。③**男女が言いかわす**。④誘い入れる。
○あたら【惜】…もったいない。せっかくの。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

○やつす【窶す】…①**目立たないように姿を変える**。　②**出家する**。
○いらふ【答ふ・応ふ】…**答える**。
○つれづれなり【徒然なり】…①**手持ち無沙汰なさま**。　②どうしようもなく物思いに沈むさま。
○て【手】…①**文字・筆跡**。　②所作。　③**腕前**。　④手段・方法。　⑤負傷。
○よし【由】…①**由緒**。　②**方法**。　③**理由**。　④風流。　⑤次第。～**とのこと**。　⑥縁。　⑦ようす。
○ことに【異に・殊に】…①**格別に**。　②なお。
○ゆかし【床し】…①**見たい。聞きたい。知りたい**。　②なんとなく**慕わしい**。
○にはかなり【俄なり】…**急なさま。突然だ**。
○わざと【態と】…①**わざわざ**。　②正式に。　③特に。
○いはむかたなし【言はむ方無し】…何とも言いようがない。
○むつかし【難し】…①**不快である**。　②わずらわしい。　③気味が悪い。
○やる【破る】（下二）…破れる・壊れる。
○たより【便り・頼り】…①**頼みにできるもの**。　②**縁**。　③手紙。　④便宜。　⑤**機会**。　⑥できぐあい。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　第六講　解答解説

〔解説〕

① a「いつしか」は重要単語で、「早くも・早く」の意味。よって、ホが正解。b「かしづく」も重要単語で、「大切に育てる・大切に世話をする」の意味。単に「養育する」のではなく、「大切に、大事に」というのが重要で、文脈上も「養育する」より「大事にする」が適当。よって、ニが正解。

② 古文常識問題。「九月九日」は「重陽」の節句。よって、ハが正解。

③ 傍線部Aは助動詞「す」。真下に尊敬語がないため、意味は「使役」と確定。選択肢ハが助動詞「す」で、真下に尊敬語「給ふ」があるが、傍線部の前に「俊頼朝臣**に**」と使役の対象があるため、使役だとわかる。よって、ハが正解。ちなみに、イは、「〜**せ**ば〜まし」の「**せ**」で、過去の助動詞「き」の未然形。ロは、サ変動詞「す」。ニは、尊敬の助動詞「さす」。ホは、「V＋さす」＝「Vしかけて途中でやめる」の意味の「さす」の連用形。

④ 「ひさかたの」や「ぬばたまの」など、特定の語を導き出す通常五文字の言葉を「枕詞」という。よって、ホが正解。関西学院大はこのように、単語、文法、古文常識、和歌、解釈、敬語等、様々なジャンルから出題され問題数も多いので、確実に取れる知識問題は落とさないように気を付けること。ちなみに、「和歌の修辞技法」に関しての詳しい講義は、『センター古文漢文対策講座』の第二講で実施していますので、和歌が苦手で未受講の方は是非受講してください。

〔解答〕

① a　ホ　　b　ニ　　② ハ　　③ ハ　　④ ホ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。